

2020/07/05

ヨハネの福音書 講解メッセージ⑤

「婚礼での奇跡」ヨハネ 2:1-11

■ マリヤとキリスト

「それから三日目に、ガリラヤのカナで婚礼があって、そこにイエスの母がいた。イエスも、また弟子たちも、その婚礼に招かれた。ぶどう酒がなくなったとき、母がイエスに向かって「ぶどう酒がありません」と言った。すると、イエスは母に言われた。「あなたはわたしと何の関係があるのでしょうか。女の方。わたしの時はまだ来ていません。」(ヨハネ 2:1-4)

当時のイスラエルの披露宴は、1週間くらい続くのが普通でした。親戚の結婚式だったので、マリヤはそこで給仕しており、イエス様と弟子たちも婚礼に招かれていたのです。一般の親子関係であれば、自分の子に「ちょっとぶどう酒を持ってきて」と頼むのは普通です。ところが、イエス様はマリヤを「女の方」と呼び、距離を取っておられます。「女の方」とは、女性に対する尊敬語です。イエス様は、マリヤと親子としてはふるまいませんでした。

これは、マリヤが神格化されないための予防線だと考えられます。人は、立派なことをした人を見ると、どんな親から生まれたのだろうと知りたくなります。将来イエス様がキリストであることが明らかになったとき、人々がマリヤを神格化しないように、イエス様はマリヤを守ろうとしたのでしょう。

「私の時はまだ来ていない」という言葉によって、マリヤは我に返ります。この息子は、「この方こそ救い主である」と神から啓示を受けた子で、その時はまだ来ていないという意味だということが、マリヤにはすぐにわかりました。この子は私の子ではなく神の子であり、ダビデの王座につく方であったことを思い出したのです。

「すると御使いが言った。「こわがることはない。マリヤ。あなたは神から恵みを受けたのです。ご覧なさい。あなたはみごもって、男の子を産みます。名をイエスとつけなさい。その子はすぐれた者となり、いと高き方の子と呼ばれます。また、神である主は彼にその父ダビデの王位をお与えになります。彼はとこしえにヤコブの家を治め、その国は終わることがありません。」(ルカ 1:30-33)

マリヤは、神のこの約束が成就することを信じて育ててきました。「この方はキリストであったのに、間違ったことをしてしまった」と気づいた彼女は、すぐに態度を改めました。

■ 水がめに水を満たしなさい（神の呼びかけに応答する）

「母は手伝いの人たちに言った。「あの方が言われることを、何でもしてあげてください。」さて、そこには、ユダヤ人のきよめのしきたりによって、それぞれ八十リットルから百二十リットル入りの石の水がめが六つ置いてあった。イエスは彼らに言われた。「水がめに水を満たしなさい。」彼らは水がめを縁までいっぱいにした。イエスは彼らに言われた。「さあ、今くみなさい。そして宴会の世話役のところを持って行きなさい。」彼らは持って行った。」（ヨハネ 2:5-8）

「きよめのしきたり」とは、水でからだを清める習慣のことで、「水がめ」は「信仰」を、「きよめ」は「神に近づくこと」を象徴しています。

「信仰」とは、神と結びつこうとする運動のことです。この運動を別の側面から見ると「愛」であり、また、別の側面から見ると「希望」です。つまり、「信仰」と「希望」と「愛」は同じもので、見方を変えて表現したものであると言えます。誰もが、そういう水がめ、すなわち「信仰」を持っているのです。

では、その信仰はどうやって使うのでしょうか。信仰の始まりは、神のことばに応答することです。イエス様は、「水がめに水を満たしなさい」と言われました。彼らはそのことばに従い、縁まで水を満たしました。

信仰とは、神のことばへの応答です。私たちも、何かのきっかけで御言葉を聞き、信じてみようという行動に出たわけです。それが信仰です。もし、神のことばに応答していなければ、水がめは空のままです。それぞれが神からもらっている信仰を使い、神のことばに応答して生きましょう。

次に、「神は人にできることは人にさせる」という原則を、この出来事は教えてくれます。イエス様は、自らぶどう酒を持っていくのではなく、人にさせました。あなたは自分にできることをやっているのでしょうか。「小事に忠実なものは大事に忠実である」と聖書は教えています。自分でやればできるのに何もしないのは、信仰ではありません。神に祈ったら、何もしないで待っているのではなく、それに対してできることをするのが信仰です。

■ このぶどう酒はどこから来たのか（信仰を働かせる）

「宴会の世話役はぶどう酒になったその水を味わってみた。それがどこから来たのか、知らなかったのですが、——しかし、水をくんだ手伝いの者たちは知っていた——彼は、花婿を呼んで、言った。「だれでも初めに良いぶどう酒を出し、人々が十分飲んだころになると、悪いのを出すものだが、あなたは良いぶどう酒をよくも今まで取っておきました。」」（ヨハネ 2:9-10）

宴会の世話役はそのぶどう酒がどこから来たか知りませんでした。水くみをした人たち

は知っていました。このことは、人は神が支えているから自分は生きているのだということを知らないが、神に応答した人、すなわち、信仰を働かせた人たちは知ることができるということを表しています。信仰とは、私達が知りえないことを知ることができるもの、つまり、神を知ることができるものです。神のことは、信仰でしか知ることができません。

哲学者カントの偉業は、人間の理性には限界があると証明したことです。それ以前の哲学者ソクラテスは「無知の知」と言いましたが、カントはそれを証明したのです。人間は自分の知恵で神を知ることができると思っていますが、それは不可能なのです。

人がものを認識するには時間と空間が必要で、時間や空間が存在しない状態を私たちは想像することができません。しかし、神は空間にも時間にも制約されない方です。それが、永遠であり自由であるということです。そのため、私たちの理性では神を理解することができず、神はいないと言ってみたり、勝手な神を想像してみたりします。これが理性の限界です。この理性の暴走をやめない限り、神を知ることにはできません。神を知るには信仰、つまり信じるしか方法はないのです。

聖書に対して、「私はこう思う」と意見を述べたり、文句をつけたりすることが理性の暴走です。これは正しい読み方ではありません。それは傲慢であり、パウロはこれを「思い上がって限度を越えている」と言いました。理解しようとするのではなく、信じる信仰が必要なのです。「神のことばである聖書を信じる」という素直な信仰でしか神の思いを知ることはできません。

大切なことは素直に信じること、信じることを求めることです。宴会の世話役は知りませんでしたが、信仰を働かせた人は知っていました。理性では「ありえない」と判断することであっても、信仰を働かせると真実が見えるようになります。

■ 奇跡を期待せよ

宴会の世話役は、あとから出されたぶどう酒がどこから来たかは知りませんでしたが、それが最上級のものであることを知って感動しました。

神は、私たちにとって良いもの、最善のものしかお与えになりません。以前よりも良い状態にするのが神です。それを本当に信じることができれば、つぶやくことはなくなります。人がつぶやくのは、神が良いものしか与えないことを知らないからです。

人は、自分の快樂や見えるところの安心に結びつくものを求めます。しかし、神にとって良いものの基準は、信仰による平安が増し加わることです。そのことを知らずにいると、神がせっかく良いものを与えようとしておられるのにそれがわかりません。

もし、死を目前にしたら、人が求めている快樂や見えるところの安心は、まことの平安をもたらすことはできません。その時、唯一の平安は、永遠のいのちを信じられる信仰です。私たちにとって本当に良いもの、それは、いつまでも残るものです。親が子に、本当に与えたいと願うものは、一瞬で消えてなくなるようなものではなく、その子にとっていちばん良いもの、消えてなくなるものではないものです。それは、信仰と希望と愛です。内村鑑三は、「最大の遺産は信仰である」と言いました。財産よりも、信仰を継承することのほうが大切です。

イエス・キリストはこの世を去る時、いちばん良いものを弟子たちに与えました。弟子たちが求めていたものは、この世の地位です。弟子たちは、イエス様の權威の下で、弟子であることが嬉しくて仕方がありませんでした。そして、弟子同士の間で、誰が一番偉いか、いつも競い合っていました。その弟子たちにイエス様が最後に与えたものは、わざとつかまることです。逃げることができたにもかかわらず捕まり、迫害され、十字架で殺されること、それがイエス様が弟子たちに残したものです。

これがすばらしいプレゼントだと気づいた者はひとりもいませんでした。しかし、「義とは私が天に帰ることだ」と言っていたイエス様の言葉どおり、イエス様が見えなくなった途端、弟子たちは信仰を働かせなくてはいけなくなりました。十字架によって弟子たちは散り散りになってしまいましたが、信仰を使って立ち返り、イエス様を求め、引き上げられ、別人のように変えられました。それは、患難を通して彼らの信仰が成長したからです。

患難は信仰を成長させます。患難は、神によって与えられるものではなく、人間の過ちから起きるものですが、神はそれを用いて信仰を訓練なさいます。患難の時、神が沈黙なさるのは、それによって信仰が訓練され、成長して、神への希望につながるからです。

ダビデは「患難を通して神のおきてを学ぶことができた」と告白しています。彼は何度も命の危険が迫るほどの患難に出会い、それによって信仰が育てられました。水がぶどう酒に変わるといふ奇跡も、弟子たちの信仰を励まし、成長させるための出来事です。もし自分が向き合う苦しみの意味がわからないことがあっても、信仰が成長することを信じ、神を信頼して、平安を手にしませう。

■ 奇跡は手にしている

「イエスはこのことを最初のしるしとしてガリラヤのカナで行い、ご自分の栄光を現された。それで、弟子たちはイエスを信じた。」(ヨハネ 2:11)

この時点で弟子たちはイエスがキリストであると告白していましたが、奇跡を見たことによって、その信仰の確信を得ることができました。

「わたしが父におり、父がわたしにおられるとわたしが言うのを信じなさい。さもなければ、わざによって信じなさい。」(ヨハネ 14:11)

神の奇跡の目的は、私たちの信仰を励まし、信仰を成長させることです。人間は弱いものですから、神は奇跡を起こして私たちを励ましてくださるのです。ですから、どんなことでも奇跡を期待して、神に助けを求めて祈りましょう。そうすれば、必ず助けられ、信仰が励まされて、神を信じることができるようになります。本当に困ったときに神が助けてくれた経験は何物にも代えがたいものです。

水がぶどう酒に変わるとは、困難が希望に変わることの象徴です。この世界で最も困難な

ことは死人がよみがえることです。この後、実際に弟子たちはラザロの復活によってその奇跡も見ることになるのですが、その奇跡をあなたはもう体験しています。それは、永遠のいのちです。神は、死ぬしかないあなたに永遠のいのちを与え、あなたをよみがえらせました。死人の私たちは、神の呼びかけに応答して救われ、永遠のいのちを得たのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。わたしのことばを聞いて、わたしを遣わした方を信じる者は、永遠のいのちを持ち、さばきに会うことがなく、死からいのちに移っているのです。まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」
(ヨハネ 5:24-25)

応答する者は生きるのです。水がぶどう酒に変わるどころの奇跡ではありません。あなたはそのいのちをすでに受け取り、究極の奇跡をすでに体験しているのです。

このことを「アーメン」と言って信じるのが、信仰による平安です。「私はキリストにあってよみがえった。私はキリストと共に死んだ。私は新しくなった。私は作り変えられた。終わりの日は来た。もはや私が生きているのではなく、キリストがわたしのうちに生きておられる。」このことに気づき、自分は死んでいたのによみがえったのだとあなたが信じるなら、あなたは究極の平安を得るのです。

あなたはすでに究極の奇跡を体験しています。ですから、これからも奇跡を期待し、神に祈って助けていただければよいのです。イエス様は、弟子を集め、奇跡を起こすところから弟子との交流を始めました。それは、彼らの信仰を励まし、成長させるためです。神は同様に私たちの信仰を励まし、私たちが成長して平安を手にするのを望んでおられます。